

博物館 Dictionary No.187

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

あまのはし だて す
一天橋立図

げんじつ くうそう
—現実と空想のはざまで—

室町時代には、数多くの水墨山水図が制作されました。でも、そのほとんどは中国の風景、しかも実際には存在しない空想の景色を描いたものでした。例えば、相阿弥（室町幕府の唐物奉行、?～1525）の手になる「月夜山水図」はおそらく瀟湘八景（中国湖南省洞庭湖周辺の八通りの景観を絵画化したもの）のうちの「洞庭秋月」をあらわしているのでしょうかが、あくまでそれは画家のイメージであって、実景に基づくものではありません。また松谿筆「湖山小景図」（図1）に一文を寄せる翫之慧鳳（東福寺の僧）は、この絵の景色を己がかつて旅した杭州西湖の光景になぞらえていますが、絵の中をいくら見回しても、西湖と特定できるような景物は見当たりません。松谿が描いたこの絵は「どこかはわからないが、きわめて風光明媚な中国の風景」にすぎないというわけです。

ところが、ここに取り上げる「天橋立図」（図2）はわが国の実景に取材しているばかりでなく、その威容を迫真性豊かに表現したものとして高く評価されています。この絵の筆者は雪舟（1420～1506？）。そう、皆さんよくご存じの室町時代を代表する水墨画家で、初めて中国に渡った日本の画家としても知られています。その彼が八十歳を過ぎた頃、丹後の地を訪ね描いたのがこの「天橋立図」です。

絵を眺めてみましょう。中央には主役ともいべき天橋立が長く横たわり、その向かって左には文殊信仰で名高い智恩寺が見えます。また橋立の上方には阿蘇海をはさんでたくさんの社寺が林立し、その背後には高くそびえる山と觀音靈場である成相寺が配されています。一方、橋立の下方にも海があらわされていますが、これは日本海に通じる宮津湾。さらにその宮津湾をちょうど取り囲むように描かれた、なだらかな山並みは栗田半島です。



図1 重文 《湖山小景図》 松谿筆
さくと こくりつはくぶつかんそう
京都国立博物館蔵

一見したところ、実景そのままを写し取ったように見えますね。もし一度でも橋立を行った人なら、「あのとき見た風景とそっくりだ」と思われることでしょう。でも、つぶさに観察すると、実景とは少し違う箇所もあります。ひとつは、橋立の根もと付近の籠神社から左の国分寺までの町並みがすごく長く引き伸ばされていること。これは町並みの賑わいを演出しようとする狙いがあったのと、そこに描き込みたいものが多かったからなのでしょう。ふたつめは、成相寺が建つ山を極端なまでに高く、大きくあらわしていることです。もし実景通りの山を描いたとしたなら、今、絵にうかがわれるようなスケール感が出せたかどうか。要するに、山水図としての出来映えを強く意識しているんですね。また、そうしたスケール感を出すために、橋立を高所から見下ろすような構成を取っていることも見逃してはならないでしょう。



図2 国宝《天橋立図》雪舟筆 京都国立博物館蔵

雪舟が描くこの「天橋立図」は、本絵（完成画）ではなく下絵と考えられています。その理由として挙げられるのは、二十枚もの小紙を貼り合わせた粗末な料紙に描いていることなのですが、もうひとつだけ決定的な根拠を示しておきましょう。なかなか見づらいかもしれません、空や山、海などに朱が点じられているのが確認できますか。もちろん、そんな場所に朱が入るのはまことに不可解です。

実をいうと、この朱は籠神社や成相寺、智恩寺の建物に塗られた朱がくついたものなんですね。つまり、朱が乾ききらないうちに絵を真ん中から半分に折り畳んだために、そうなってしまったというわけです。先に、下絵であることの決定的な根拠と述べたゆえんです。

では、本絵は描かれたのでしょうか。この点については不明なことばかりなのですが、徳川将軍家に伝来し、のちに焼失したという言い伝えが残されています。

(美術室 上席研究員 山本英男)